

“建物”
7歳女 イタリア

幼年美術

591

2018 新年特別号

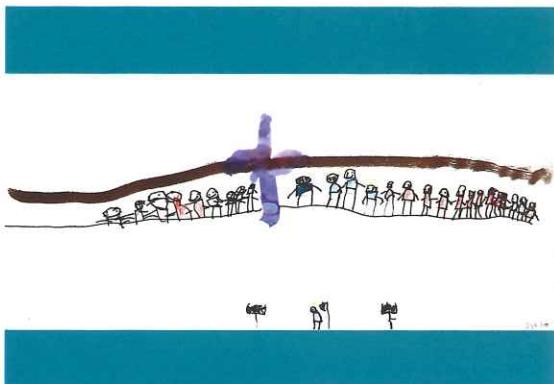
発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3
ペンてる(株)大阪支店内
全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎ (06)6747-1601
発行人 廣富靖海
年間購読料 3,000円 1部300円(送料込み)

第47回世界児童画展

優秀作品



“かいぞくとふねがいっしょにあそんでるよ”
4歳女 和歌山県



“みんなでつなひき”
5歳男 滋賀県

新年のことば

九十歳到達の
私の生態(いきざま)

全国幼年美術の会
会長 廣富靖海

私は九十歳の到達点を、今や眼の前にしています。新年に当たって、常に身につけようとしている、私の生活信条なるものを、纏(ま)とめてみました。

一・物事を決して悔やまないこと。
二・言い訳を決してしないこと。
三・絶えず真剣に努力をすること。
四・頼まれないでも、親切のありつけを尽くすこと。
五・自身の功名・手柄を、決して広告しないこと。
六・偉そうな振りを決してしないこと。
七・物に執着のないこと。

以上であります。これらは、私の生活基盤とも言えるもので、世間の尺度から見ると、固苦しく愚直に思われがちでしょう。しかし私は、出来る限り、これらに対応し、時に困惑しながらも、何とか現状を克服しようと頑張っております。当然、困難には直面するでしょう。しかしそれは、私に与えられた宿命と思い、なげなしの努力を払っていきたいと思っています。皆様もどうぞ、あきらめず、あせらず、自分の持てる能力を更に高め、順序立てながら困難に当たり、子ども達の幸の行為の捨て石となるべく、その悲痛な心情と実行力で、指導者一同一丸となつて現状を乗り

切って戴きたく思っています。一人でも多くの子ども達が、何一つ迷うことなく、己の持てる力を存分に發揮できる環境構築を、私達は手を携えて、私達の能力を發揮してやつていいこうではありませんか。

全国幼年美術の会の先生方、何の因縁か凡人には判りませんが、少なくとも私達は、子ども達を取り巻く環境の整備の為の土台になるということは、論ずるまでもないことです。不可思議な縁ではありますが、子ども達という共通の存在に、明かりを灯す使命が与えられ、その使命に取り組まれている皆様です。好むと好まずると、他の職とは比べる術もないこの仕事を、聖なる姿と見る人もいるでしよう。単に想うだけでなく、陰になり日なたになつて、関わりを持つてくださる人との繋がりに勇気を持つて、授かれた天職を無駄にせず、機能する働きのある者として、共に今日も明日も頑張つて行きたいと思うのです。

子ども達と関わるという、自分だけに与えられた、此の立場にたたされたり、否、自ら立つことに使命感を持たれた皆様、どうか、この新年に当たり、私の如き拙き者の想いを汲んで戴き、希望ある新しい歩んで戴きますよう、心の底よりお願ひいたします。どうぞ本年も宜しくお願ひいたします。

幼年期の言葉の獲得と表現について

学校法人三光学園理事長 千鶴幼稚園園長

藤井 行夫

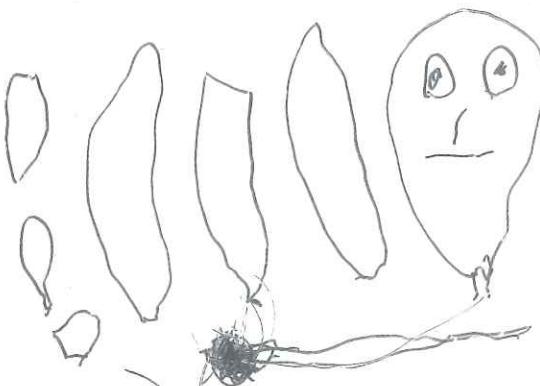
ヨハネ伝福音書の第一章は、「太初に言あり、言は神なりき。」で始まります。仏説無量寿経は、阿弥陀如来が名号になり、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とその名を称えさせることにより、一切衆生がその救済の対象であると説く、浄土教思想の根本經典です。何故はじめに言葉があるのか?名を称える行為により何故人は救われるのか?いずれも言葉の海に住んでいる生きとし生けるもの全てに、言葉で神や如來の存在を示されたもので、全ては言葉の海で存在しています。このことを私たち現代人は、言葉と共に生きていることがあまりにも当たり前すぎて認知せずに過ごしています。宗教や哲学や芸術にとって、言葉とは何か?大いに興味深いところです。関連性があるに違いないと推察してはいましたが、昨年の全国幼年美術の会夏季大会で、人間の進化と言葉の獲得におけるその関係性について、確信に変わる講演を拝聴でき、感謝の気持ちで満たされました。

それは、齋藤亞矢先生(京都造形

芸術大学准教授)のご講演「ヒトはなぜ絵を描くのか」でした。ヒトの子どもは円と円を組み合わせて顔を描く。でもDNAの違い一・二%のチナンパンジーにはそれができない。ヒトは満三歳ぐらいから見たてあそびをして、表象することが出来るようになるが、チナンパンジーは塗たくりに似た行為を楽しんではするけれども、見たてることも表象することも五歳になつても出来ない。「想像」と「創造」の観点から、旧石器時代の洞窟壁画を出発点に、脳の機能や言語の獲得をみていくと、ヒトが描くことは、今ここに「ない」モノをイメージして補うという認知的な特徴があり、言語の獲得と関連しているのではないか。それが「ヒトはなぜ絵を描くことができるのか」という問いに対し、先生が導きだされた答えがありました。

講演を聴いて実に感動しましたし、幼年期の表現遊びは、幼児が発達段階で獲得したその子なりの言葉が聞こえてくる活動であつて欲しいと、今更ながら感慨深く思いました。

実際に広告の白い裏紙を利用して、画材を使い、幼児Aと遊んでみました。一歳十ヶ月の頃からは徐々に筆圧が強くなり、ぐるぐると円を描き続けても、紙からはみ出したりはしなくなりました。「一歳になると」「爺じはどう?」「婆ばはどう?」「ここがお父さんのところ」「お母さんのところ」等々いろいろ設定し、「A君はここよ」とスタート地点を決め、線描きで繋がる遊びをさせてみると、目を輝かせて取り組んできました。「今度はカエルさんになつて、模倣ができ楽しめるようになると次第に自発性を發揮し、「走つて行くんよ。」「お母さんの車で行こうか。」「A君はゴロゴロ行くんよ。」「蛇ピヨーン、ピヨーンと行くよ。」「次は新幹線でピューンと行くよ。」「蛇ピヨーン、ピヨーンと行くよ。」「蛇模倣ができる」と、言葉と一緒に歩く練習を始めた。乳幼児Aは、今時珍しい大家族で育ち、一歳から保育園に入所したので言葉の獲得が少し早く、語彙の数が周りの乳幼児より多いように見受けられましたが、成長の過程は至極普通に育つていて、乳幼児Aは、二歳十ヶ月になり、再び乳幼児Aに広告の白い裏紙を用意して「お絵描き遊びをするよ。」と声をかける



ラーペンで描きだしました。驚いたことに、描きだし地点にどの線も戻つて繋がっているのです。歪な丸の完成です。一つづつ描いた順に聞いてみると「丸」、「バナナ」、「四角」、「バナナ」、「小さなバナナ」、「みかん」、「お耳」、似たように見える歪な丸もそれぞれ違うものを描いていたことが解りました。耳を描いたので、最初の大きな丸に顔を描いてみようかと促すと、目を二つ、丸の中に黒目も描けて、□を真一文字に描いてから鼻を目と□の間の丁度いい具合のところに縦に線を入れて、出来上がりかと思つたら、間髪入れず一本短

い線を描き加えました。何かと尋ねると、につくり微笑み小さい声で、「足」と答えてくれました。いわゆる頭足人間です。最初はどきつとしで首かと思ったのですが、よく見て首かと思つたのですが、よく見ると足の先を左右に曲げて描いてありますまざしく足です。

気分が変わつてその後、横に長いものを描き太い方を塗り潰しているので、「今度は何かな」と聞くと、「大根」と答えが返つてきました。生活体験の中で、休みの時、母親と畑に大根を掘りに行つたのが印象に残つていたのでしよう。確かに、お店で売つてある立派な大根ではなく、この秋の気候が災いして余り実らなかつた細い大根が描かれていました。

母親からの後日談で、三月生まれなのに自分は母親と同じ五月生まれだと言つて主張を変えなかつたり、たまたま食卓に並ぶビールを自分も大人だからと言い困らせるそうです。母親のすることなすことを同化したがるという幼い子どもが持ち得ている一面のようです。確かに母体にいた時からいつも一緒に、生まれた後もずっと一緒にいたのだから、大人は「母と子」の二人称を認識しているが、子どもにとつては、「母子」の一人称のままいる感覚が持続しているのかも知れません。とにかく子どもの感性には、世間の常識や、既成概念が通用しないのは当然のこと

であります。

子どもの表現の面白さは、人間形成の初期であり、言葉の海に出たばかりですが、この子なりの発達段階で研ぎ澄まされた感性が、まるで詩的言語が天から降りて来たみたいに、ときめきを發揮する絵が本当にたくさんあることを、毎年子どもの絵を審査しながら見続けています。その子にとって、後にも先にも今しかできない作品です。

物質が溢れ、科学技術がIT化を進ませた時代が待ち受けている子らにとって、大人になることを急がせるのではなく、幼児期に発達の段階を踏まえて、その年齢を充実させて行くという方が、時代にとつても必要なものを生み出す根源力や対応力を育ち磨いていくのです。こういう研究は既に種々発表されています。齊藤亜矢先生の論点である、子どもが描くことの認知的な基盤は、今ここに「ない」モノをイメージして補うという認知的な特性であります。言語の獲得と関連していることがよく確認でき、私なりに実証して見たかったので大変興味深かったです。

子どもが育つ理想的な生活環境は、豊かな原体験を積んでいくことにより、経験値が高まり、感覚的能力を育むことと同時に言葉を獲得していくことができる環境であると考えています。日本には四季があるから、

子どもたちは季節の風を受け、自然とという小説の中で遊び、伝統的な行事があるから、時空を超えて心を動かす刺激を受け育ってきたことは間違いないと思います。日本の幼児教育が世界から注目を集める所以は、正にここにあると考えます。

日本の色彩の豊富さとその色名の美しさに感銘を受ける人は少なくないと思います。昔の人が生活の場で自在に色彩を楽しんでいたことを窺い知ることができます。日本画の顔料も凄いですが、染め物の色がまた凄いです。銀鼠、利休鼠、深川鼠、鳩羽鼠、桜鼠、藍鼠等々、鼠色だけで百色あり、西洋の比ではありません。色の方から名乗りを上げているかのような色名です。そのきめ細やかな感性と繊細さを共有できるのが言葉の威力で、匠の技を生み出す基となることがあります。様々な色彩を求めて、野山を探索して発見したのでしょうか。持ち帰つては、草木染めで確かめることの繰り返し。大変なようですが、このような行為を先人たちは毎日のように求め続けたからこそ、日本の色名は生き物や植物、色そのものの名前と、色数の多さだけに留まらず、名付けの感性が非常に豊かです。民衆が布を織り、色を染め、物を造ることが生きることと一体であつたからに他ならないでしょう。

先人たちのあゆみの基盤になる姿を、無邪気に園庭の砂場で遊んでいる子どもたちの姿に重ねて見ている私です。幼児期の子どもたちは、飽きること無く、小さい如雨露(ジョウロ)やバケツで水を延々と砂場に運び遊んでいます。造っては壊し、造っては壊し、来る日も来る日も同じ遊びを繰り返しているように見えますが、いつしか大人の目でも気づけるように、遊びが発展し次の展開に進んでいることを保育者は見て経験しています。このような遊びの中から、五領域の全てに係わる育ちやすいをしていることを保育者は知っているのです。

幼児期の絵は、この世に出て関わりを持ち、言葉として認知したもの、出いや、出来事、記憶に残り感じたことを、その年齢の時に自分自身で受け止めた生きた証として、言葉と描写を模索して精一杯伝えようとして取り組んでいるものだと思います。そのままの姿で十分素晴らしいのです。

幼年期の子どもの絵を見る私の思いは、斎藤先生の言葉をお借りするところにあるイメージを「外化」しているのだから、否定できる要因はどこにも見当たらない、あなたが生きた証そのものを見せてくれて有り難うと、肯定するしかないのです。

広告

日本製 ISO 9124-3適合

新配合!

従来品よりカス出を約60%削減(16色平均当社比)し、机が汚れにくくなりました。

カスが多いと机がこんな事に…

旧配合 新配合

新配合

いろいろな技法に最適です!

ひっかき絵に最適 はじき絵に強い

色を重ねてひっかくと下地の色あざやか。

“水彩えのぐ”をしかけはいき。

線描きだけでなく、濃く鮮やかに面塗りができます。

プラケース入り16色【極太】PTCGPN3-16
¥660+消費税

紙箱入り16色【極太】PTCGP3-16
¥600+消費税

箱をフタに重ねても沈みこみません

取り出しやすいポップアップ式です

ケースを重ねて重ねてもガタつきません

日本製 ISO 9124-3適合

新配合

新配合

新配合

新配合

新しい年をお迎えしましたが、遅ればせながら、本年も宜しくお願ひいたします。新聞の記事で、東京都大田区の保育士、久保田修平さん(33)という方が紹介されました。保育所で働くうちに、大人の都合で管理していること、みんなで同じ遊びをし、運動会の練習もみんな一緒にすることに違和感を抱かれています。「子どもの主体性を大切にしよう」と言いながら、大人の都合で管理しているのは?」との疑問から、「望ましい保育とは何だらう」と、そのヒントを海外に求めて、主任保育士の職を辞して、世界の保育所や教育施設を巡られたことが紹介されています。

詳細は紹介出来ませんが、ハンガリー、ドイツ、デンマーク、オランダなどの欧州の保育所や小学校は「引き出す」保育・教育を開催していますが、デンマークでの学びで、保育の合間にコーカピーや紅茶を楽しむ時間を作られています。そのためなかなか考えさせられる内容でした。今では再び保育士として現場に立たれる久保田さんは、デンマークでの学びで、保育の合間にコーカピーや紅茶を楽しむ時間を作っています。久保田さんの旅の様子は、ブログ(<https://ameblo.jp/aurorajourney/>)でも発信されています。

そこで、領域表現の真骨頂「感じる心」ではないでしょうか? 引き出す教育・保育が出来ているのでしょうか? 何を引き出すのでしょうか? それこそ、領域表現の真骨頂「感じる心」ではないでしょうか? 私達、幼美に関わる者の姿はどうでしょうか? 引き出す教育・保育が出来ているのでしょうか? 久保田さんは仰います。「子どもには、知らないがしろにしているのではないのかと思いました」私達の学びとそれに基づく活動が正に問われているのです。

(羽溪)

あとがき